

新體詩集

特 71

細越夏村著

818

靈 笛



252
188

東京
日高有倫堂藏版

301401-001-5

特 71-818

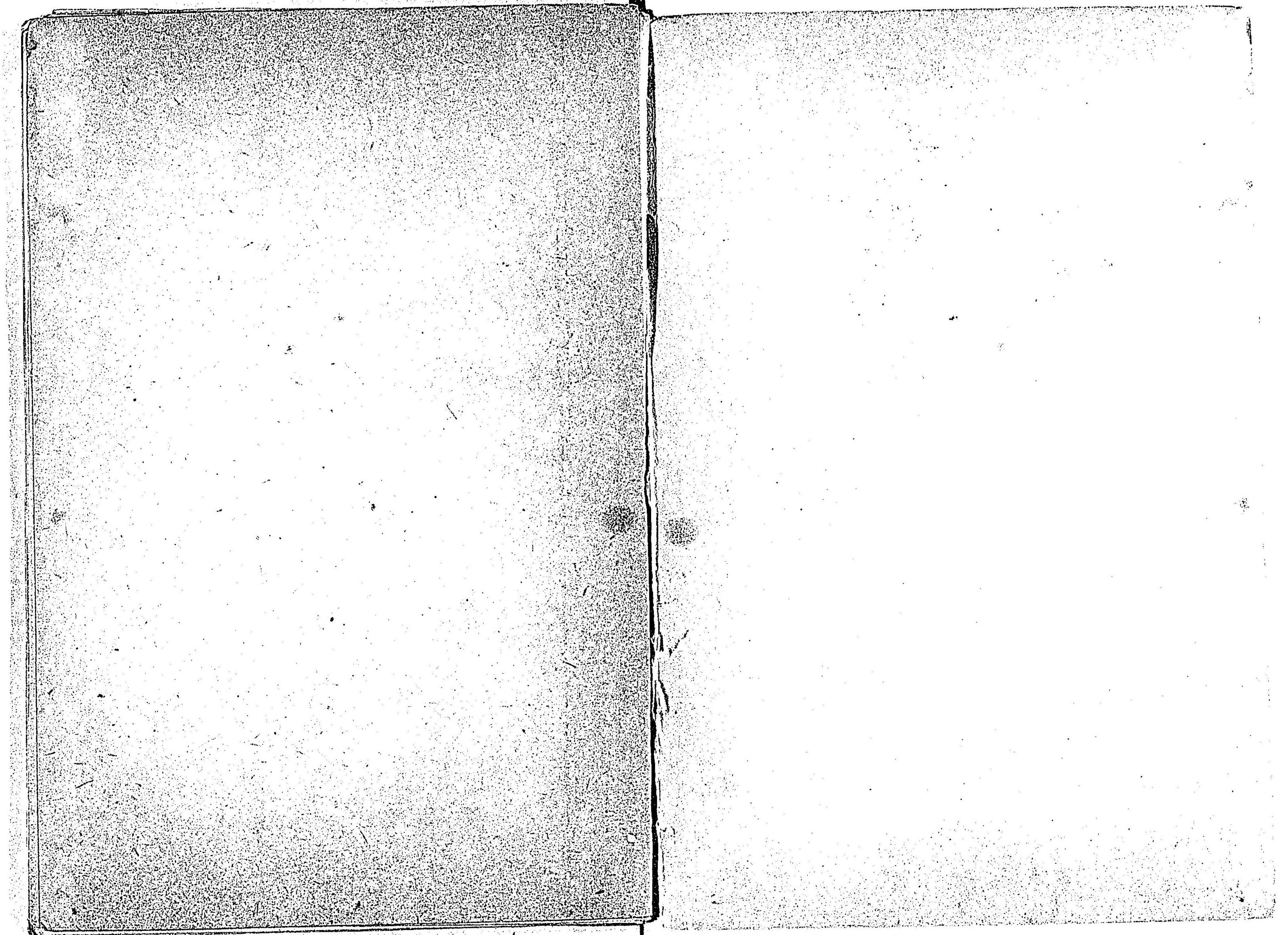
靈 笛

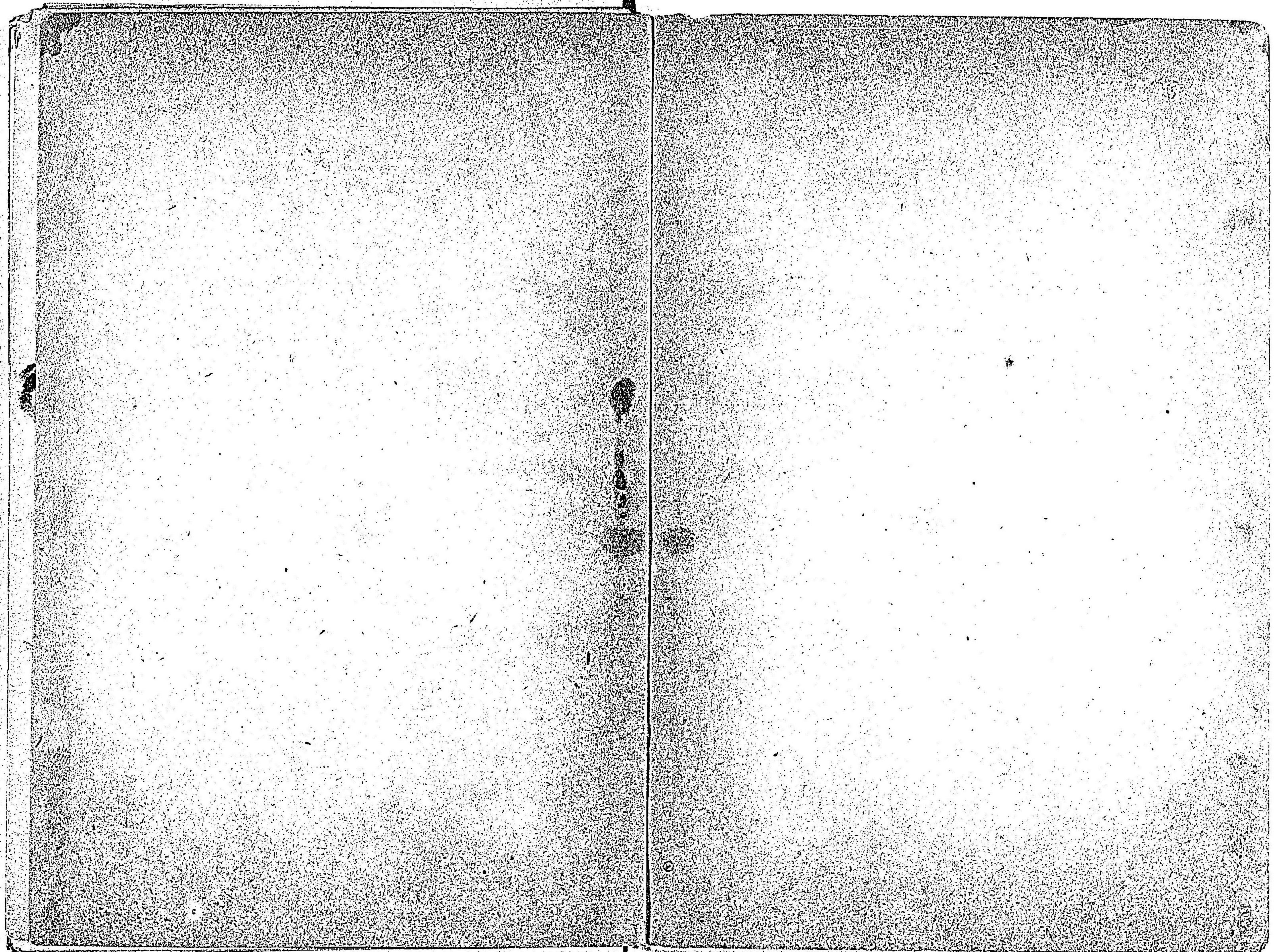
著者 一省 越細

M39.2

DBG-0001







特71
81A

序

予の詩を作るや	教の爲に非ず。	あこがれ心地を	執りたる筆	行く文字の連れ
---------	---------	---------	-------	---------

元より、主義の爲に非ず、風
唯、時ありて、われと故知らぬ

胸に湧き立つ感想の堰きあへ
端の動きに、たのづから成り
跡こそ、此集を満たせるもの

なれ。是或は詩に非らざるべし、是或は詩なる

ざし。そは偏に世の評家に任かず、又何ぞ關せ

んぞ。唯、わが歌ひし所の真情、幽趣、或は、

予、唯、わが歌ひし所の真情、幽趣、或は、

明治
39 2 16
内交

奥秘、優婉の、世の惱める心を慰め、渴ける靈
を潤すもの無きやを思ふ。これ、予が敢て、此
粗雑なる一小冊子を公にする所因也。

明治三十九年一月下澣

予、此の書は、下戸塚村の僑居にて

著す。著者の誌

予の親を慕ふ文、

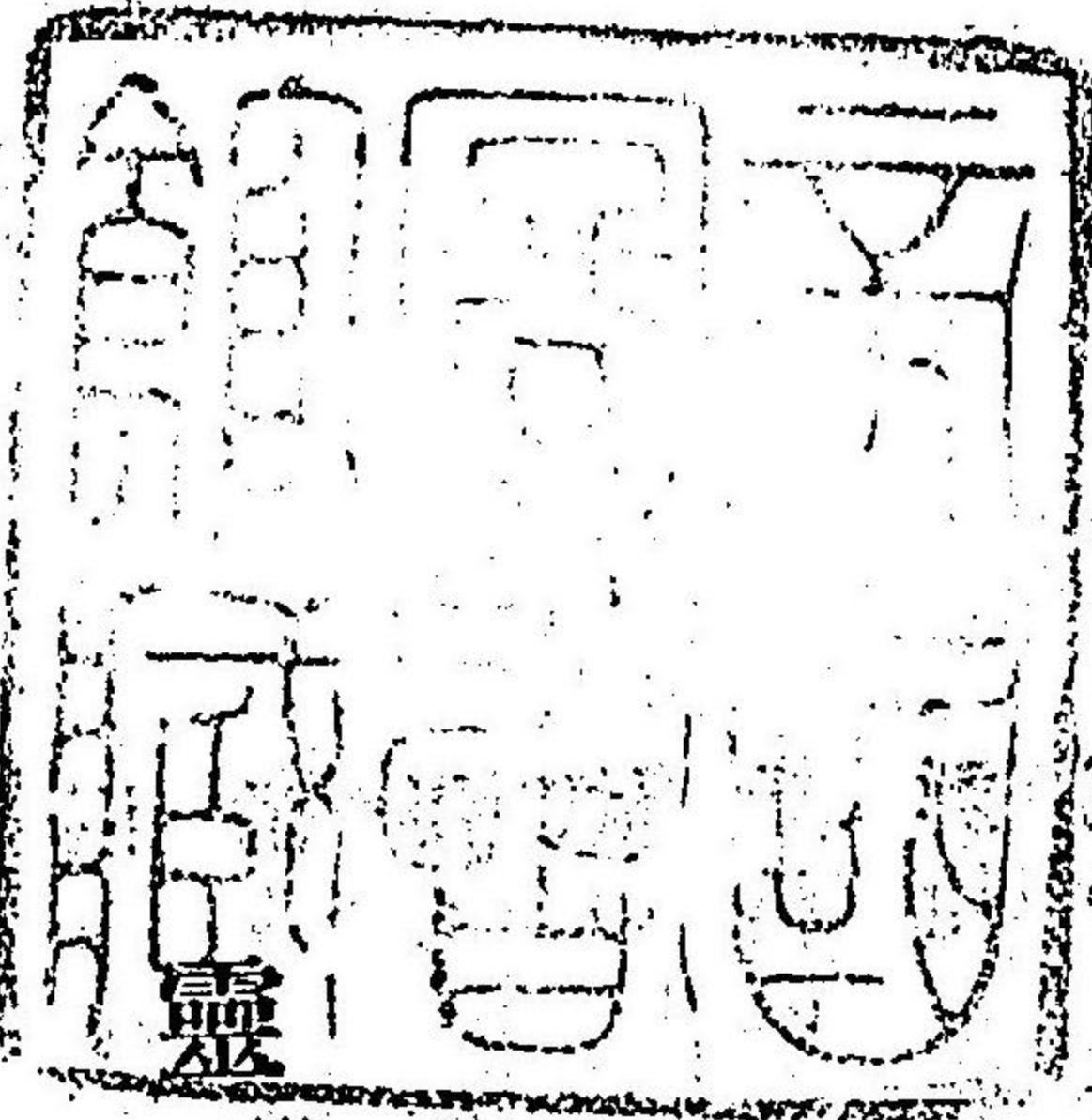
表

目次

靈 節	一
花 片	二三
沼の底	二八
みね子	三五
廢 兵	三八
道しるべ	四三
おこがれて	四九
こまに	五二
愛	五四
沈 黙	五六

花 賣	五八
秋	六六
古 壺	七四
ねもかけ	七八
ひさり火	八〇
君ころは	八一
人へやる扇に	八三
幻 想	八五
黄金小篋	八七
金 鼓	八九
閉ぢよ早く	九四
愛の門より	九六

鏡ヶ浦雑詠	九七
紅文字	一一三
もたね	一一七
古井戸	一二一
春の日	一二八
靈 鐘	一三一

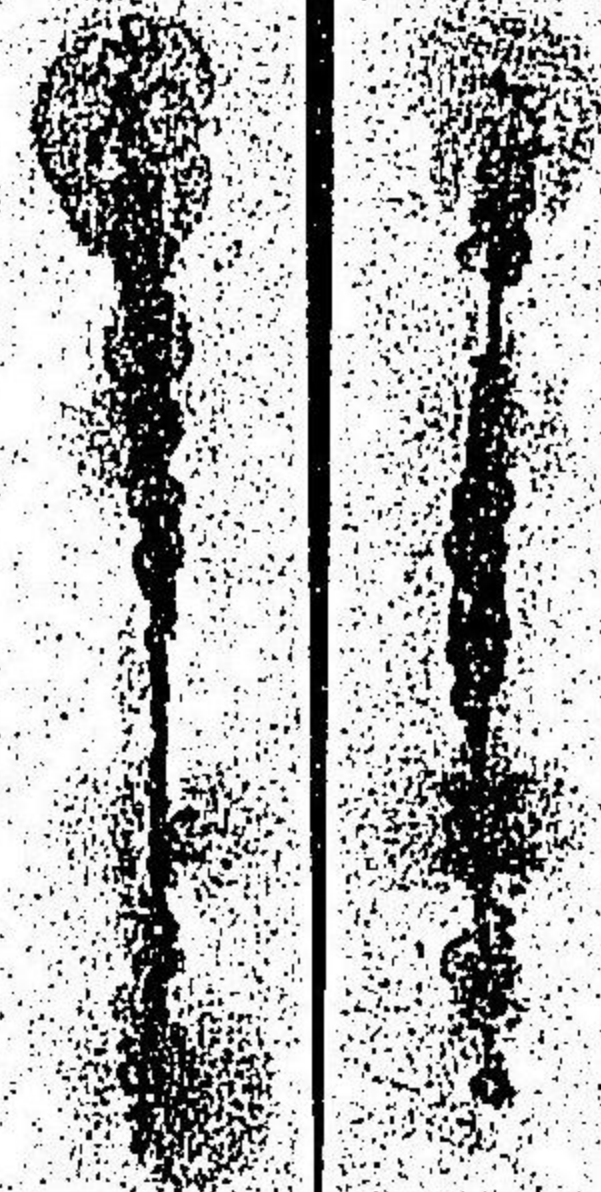


霊
笛

笛

細
越
夏
村

琥珀の榻に身をよせて、
蘭麝の香を泌む下、
琉璃の瑠璃の天蓋、
瑪瑙の臺滑らに、



王は 戎衣じゆいの 片袖かたそでを
脱ぎ かつろげし 右の 手に
舉げし 夜光やかうの 盃さきは
黄金こがね さらめく 美酒みさけの
溢るゝ ばかり、美女くわしめ
酌しやくみ まゐらせど、今宵は
得も 酔よひまさで、霜しもれく
鬢かみの 白髪しろがみの 増まし 見みゆつ
千疊せんじやうの 青玉殿せいぎよくてん
群臣ぐんしん 額かぶたを 垂たれて、
死じの 宮みやも かくや と ばかり
寂寞じやくまくの 傾かたむする 所

明月 雲を 開ひらけは
白光びやくくわう さつと 迷まよつて
野のの 如ごとき 床とこを 流ながれぬ。
折ましも、妙たえの 笛ふえの 音ね。
霧きり ふくむ 氣きを 波なみ立たせ、
昂あきれば、雷神らいじん
雲うみを 蹴かつて 風かぜに 駆かり、
沈しづめば 蒼龍そうりゆう
海底かいぞうに 潜ひそむ が 如ごとく、
沈痛しんどう 悲壯ひさうの 一ひと曲きよく
遠とほく 近ちかく、神韻しんいん

漂として 搖曳す

群雄 感 極まつて

聳やかす 鎧の 袖

相觸れて 殿上の

こゝ かしこ 憂々の 音

王侯 眉を 擧げて

「やよ、端近き 武士、

かの 笛の 主を 率て 來よ

紅欄に 凭れる 若武者

君命を 畏みて

飛ぶ が 如 階段 降る

問も あれや 百尺の

鐵壁の 外を 駈ぬ。

程も 無く、 燦爛の

王坐に 近く、 若武者

ひれ伏して、 御威の

恩言に かしこむ 側

笑 負へる 白衣の

老行者 金剛杖を

突き 立てし 六尺の

大軀は 仁王 非ずば 不動

胸を 蔽ふ 銀髯 長く

颯々と 風に 搖げり、

王侯 莞爾と 笑み 玉ひ、

聖者よ、卿が 笛の 音は

何なれば、かは 悲壯なる

老仙 さながら 裂けたる 鐘の

音聲 緩く、明君よ、うは、

英雄 敵を 破つて、

屍丘 血河の 最中に、

無量の 感を 謠ふてふ

一曲の 古調なればぞ

英雄 敵を 破つてとや

繰返し、又 繰返し、

沈吟に 俯向ける

王 慨然と 顔を 擧げ

「あゝ、敵破る 敵破る

英雄もがな、おゝ、

聖者よ 聞かれよ、我

干戈を 交へて 七歳、

暴慢 非禮の 鄰邦

何事ぞ、旗鼓 日に 盛んに

正を 助くる 神なきや、

戦ふ 毎の 我が 敗

武勇に 古き 我國

あゝ、父祖の 威稜を 奈何、

聖者よ 我 熟々

御相を 観するに、

眉宇の間 靈氣、溢る、

願はくば、軍師 となつて、

三軍を 指使せずや。

老仙 心地 よげに

白衣の 肩を 高う

「あなかして、異常の

眼識の 程 ねろろし

老餘の 瘦軀、何物

要ねばす 君にしわらば、

馬前に 斃るゝ 榮を 享けん、

さらば。とばかり 下す 笈の

扉 開けば、燃ゆる 緋の

直垂 伽羅の 香も 高う、

黄金 造の 軍配に、

吳孫 六韜三略の

淺黄錦の 巻の 物、

老仙 王を 顧みて、

「勝算 見ませ、茲に 在り、

敵の 運命、はゝゝゝ、

あな 笑止、あな 笑止、

天に謝す、はからずも、
此宵を、かくはして、
聖者、否、維幕の師、
尊き此一人を、
與へ玉ひし神慮を。
王侯、諸手を胸に、
仰向けし額に、分れて
肩の邊に、さやくと
金冠の、瓔珞の、
搖らぐ音に、滿殿の
將士、思はず手を組み、
月明き空の方へ

幾百の腫、据ゑたり、
老仙、笛を把つて
聖盟の曲、蕭々と、
行く雲も、過まれり。

王侯、我に歸れば、
玉顔の麗しう、
莞爾と笑を、湛へて
軍帥よ、願はくば、
此方へ、と、躬を先、
玉榻の上より、起し
燦爛の、玉衣を、曳いて、

廻廊の 幾うねり、
青石の 階 攀ちて、
天主閣 百丈の
樓上に 仙者を ひいて、
月光 漂渺の 彼方、
大江の 彼岸に 淡く
涯しなき 緑野を 指して
軍帥よ、 軍勝たば、
願はくば、 彼の 沃土を
静養の 地に 領されよ
薄謝 たゞ、
小國の 貧を 耻づ。

江の岸 十里、
白逆の 開く 音に
白鳥の 醒むる 朝あけ、
老仙は、 青毛の 駿馬を
階の 根に 寄せて、
緋總 垂る
金襴の 袋に 納れし
靈箱を 王に 献じつ、
軍勝たば、 敵退かば、
るの 刹那 此 笛に
れのづの 音 妙ならむ

願はくば、是を先づ
袞龍の御襟に秘めよ
さらば君、我行かむ
唯、王よ、笛の音を
夫れ、待ちませと
野山に續く三軍の
黒潮、次第に遠く、小く。

こは、何の瑞兆ぞ
夕榮の光、長く
漂渺と、金色に
煙る、ろの深みより

一條の桂の枝
空を切り、虚に鳴つて
玉殿の床の上
颯と、落つる間もわれ、
王が胸なる、靈笛は
曉明と、あつぐから、
妙曲の、いみじさや、
王侯は、歡喜の餘、
跳び、あがり、これどれば、
暮れ、かゝる、遙の、彼方、
山間を、雲の如、
歸り、來る、軍勢の

凱旋の 旌旗
翻翻と 勇しう。

幾千の 篝火
煌々と 相映じ、

夜を 知らぬ 明るさ、

百萬の 勇士

戎衣を 解いて、

戦勝の 盛宴に

歡樂 今や 闌

老仙 襟を 正し

徐ろに 王に 云ふらく、

老拙 天祐に 依りて、

幸に 軍に 勝ち、

敵勢は 將を 失ひ、

遠くも 潰い 去りぬ、

茲に 我務 終へたり、

願はくば、かの 美土を 得て、

閑雲夜鶴、

悠遊の 餘生を 享けむ。

君侯は 玉榻に 頽れ

醉眼を 怪しく 見張り、

からくと 冷笑ひ、

こは、何を 老帥

は、こや、聖者よ、

耄せりな、呆せりな、

かの 沃野 ころ

我邦に ことなき 寶庫、

財穀 の 産

數を 知らず、

今 ろを 卿に 呈せば、

は、賢明の 聖者よ、

我國の 支持を 如何。

語りも 終へず、王者は

昏眠の 厨を 高く。

夜は 更けて 露 満ちたり、

兵 散じ、篝火 消えて、

月 落ちし 闇の 城裡

蕭々の 松風に

聽けば 無常の 響あり。

老仙 天を 仰ぎ

浩嘆の 久しうて、

豆大の 草野、何物、

はしたなき 小慾、

義を 捨て 恩を 忘る、

貪婪の豎子、あゝ、
危いかな 此國

さもあらばあれ、又
何ぞ 關せんや、さらば、
雲水 悠々の中、
放浪の 懷をやらむか。

漠漠の雲 暗く。

もの 寂びし 午すぎ、

老仙は 舊の 白衣に

笑 負ふて 飄々と

城を 出で、 一葉の

扁舟を 江に 浮けて、
流水の 誘ふに 任せ、
恬淡として 去るを
將卒 悄として 岸邊に
老帥の 影を 惜みつ、
柳蔭に 並み 立ちて、
彌遠る 舟 慕ふ
折からに 一團の
奇火 熾に 燃えて
天より 落つと 見る 間に
對岸は 見渡す 限り
渦巻き 狂ふ 火の海

すさまじき 奔騰に
千頭せんとうの 緑野りくやは
忽たちまちち 洵まことる 無涯むげの
砂漠さぼくもや、かくと 計り
焼野原やきのはら とこしへに
礫がら礫がらの 砂上さじょう
一草いちそうの 緑みどりだも 無し。

花片

美の神みのかみ 絶たす 刻々こくかく、
天上てんじょうの 百花ももはな 盛もりし
靈籠たまごを 胸むねにして、
虚空こくうを 舞まひつ、優手やさてに
持もちあまる 花片はなびらを
人の 世よ さして 投げ 行く。

血潮ちゆうしやう 薫かほる 聖せいき
若わかき 胸むね のみにぞ
投げられし 花片はなびらは

停まりて、其處に、
人の身の墓 被くまで
萎まずて、戀の
美しき 情思を 醸す。

世の 羈絆、寒風

——うば「利」より吹く——

戀の花 つんざくと
習俗の 砂塵を 捲きつ、
健全と 幸福てふ
ねはけなき 名鑑ひて、
うが、樹つる「道」てふ 旗は

上下 ともに 二千載

美 しさ 若人が

斷腸の 血を 吸ひて、

利の 巷に 高う はためく。

理と云ふか、律と云ふか、

利に 敏き 賢てふ 枯老

何時の 世よりか、敢て、

ほしいまゝに 規矩を 作り、

うが 頑き 冷きをもて、

天の賜與、自然の 快樂

宇宙の詩 美の極致を、

測り 誣ゆる さかしら。

うつし世、肉の動く 瞬時を

誇らしげなる うの凱歌や、

むしろ、狗猫の 僑慢

憫笑に 値せんや、

法よ、繩規よ、利得よ、

卿が 冷銳の 刃は、

熱かさ、軟かさ

若人の 肌膚を

自らの 血をもて

碧黒に 塗り蔽はせぬ

あゝ、されど、相思の、

相抱の 靈精は、

天苑の 故郷に 再び、

燦爛の 花と 咲いて、

常春の 陽光に

漲り 燃る 薫香は、

見よ、山野 河海と 共に、

國亡ぶるも 君變るも、

地水の 續く 限り、

人畜の 相住む 極み

遍満し、 磅礴す。

沼の底

(一)

いづこより 落ちたりや
わが 影と 相並みて
水の 上に 此の影
花ならぬ 星ならぬ
花よりも 美しき
星よりも まばゆき
おゝ、 妙の 此の影。

緑葉に かくまれて、
世を 遠き 石に 倚り、
花野の 奥の 隠沼
寂寞を 吸ふ 眞清水に
笑む 此の 影に 見とれつゝ
うつけ 心地に 春の 日は
霞に 昏れて 月煙る。

(二)

ろの 影の ゆかしさを

ろの 水の 清けさに、
岸 近き 浅みに
いつしかも 降り立てば、
ろの 影は かなたに
ろの 水は いや清う。
ろの 影の ゆかしさに、
その 水の 清けさに、
溺るべき 人間の 身を
忘られて いや行けば、
ろの 影は 又も かなたに、
ろの 水は いや、清うて。

今は つゆ 恐れも あらず、
美し、かの、ゆかしの 影を
抱かむぞ 唯の ねがひ、
あこがれて 追ひ 行けば、
かの 影は いや、ゆかしう、
その 水は いや、澄みたり。

(三)

あこがれて、うつたへに
追ひ行けば、かの影は

あなうれし、ろくに止りて、
ほゝ笑は我を招ぐらし、
ひた走せに波を亂して
ひしどかの影を抱けば、
あゝいみじ、あなくわし。

恍惚ど、氣息せまる
我身を緊く抱きて、
かの影はいよく沖へ、
眞清水はいよく深う、
倏忽に沈みしは
八千尋の沼の底。

あゝ奇し、水の底に
人間の身ながら、我は、
かの影とからみしまゝに
夢のごと、今も生きたり。

おそろしや、思へば、
光とどかぬ遠き底の
こゝに、しあるを、今又、
美しき影にひかれて
軟泥を沈みかけたり。

うつくしき、思へば、奇しき
この影とだに抱かば、
軟泥の底にしる
あゝ、我は死なで在らむか。

あゝ、我は死なで在らむか。
この影とだに抱かば、
軟泥の底にしる
あゝ、我は死なで在らむか。

みね子

人の御前に俯向きて、
ほの丹摺らふ、雨の頬を
袂の端に埋めしより、
他に憚る苦艱を
寝られぬ、夜半に、髪噛みて、
晨の鬢のはづれ勝ち、
夕、わびしらの小鏡に
色蒼褪めし、面わかな。

十九を、ゆかしき 人に 病み
日毎、愁嘆に 細り行く
肩が 淋しき 戀衣、
悶れて ちぎる 袖口に
にしむは 紅か 唇の 血か、
情濃き 君が 熱き
涙の 玉の 滴りに
洗はるゝ 夜の 無かりせば、
生きて 悶れて 泣かむより
淵の 毒蛇の 餌たらし。
弱き身の、世に 強ひられて、

遂に 汚れん 身なるもの、
茨を 抱く おもひしで
あだし 男に 添はんより、
法は 鎖を 巻かば 巻け、
道は 獣と 誣ひば 誣へ、
その かみよりぞ、我が魂を
納め まつりし 聖の宮――
君が 御胸に 額伏せて、
一夜の 春を 咲きて 散らなむ、

廢 兵

夏月 白く、濃緑の
雑木林を、揺り起る
夜の 冷風に 洗はれて、
烟る 光の 薄綾を
軟らに 被せし 遠村の
社を 載する 青芝生。
村の 若者 五六人
日毎の 業に 筋張れる
銅色の 裸體にて

月良き 宵の 娯樂に
素人相撲の 眞最中。

月の 光の 接吻に
嬉し涙の 露浮けて
蘇り 笑む 夏花の
小徑を 分けて 怪げに
よろめき 出でし 人の影
薄氣味 悪き 撞木杖
其れを 力に よろくと
興じ さいめく 若人の
勇める 群に 近きぬ。

角力者等は 皆 駈け寄りて

片足人を 取り巻きつ

田舎濁聲 まちくくに

「善うこそ 此所へ、太郎兵衛、

三年前の 今頃は、

汝れこそ 村の 剛の者、

かなふ 者どて 無かりしが、

御國の 爲の 戦闘に

今は 不具者の 身となりて、

再び 相撲 とる事も

出来なう 爲つた 不幸者、

なれども、其れも 國の爲、

あきらめやれよ、 太郎殿

身ころ 強けれ、情には 脆き

百姓共は 涙聲。

折しも、風の さと薫じ、

綺羅の 袂を 靡かせて、

進歩を 移す 美し女を

右の 腕に 擁しつゝ、

金鵝勳章、 従軍章、

参謀肩章、 旭日章、

胸狭き迄、 煌爛と

煌爛と

掛け 列ねたる 盛装の
一將校は、ほろ酔ひて、
葉巻煙草の 烟青く
跡に残して、悠々と
月野の 彼方、蒼茫の
銀波十里の 湖岸に
高く 聳ゆる 乳白の
洋館 さして 過ぎ行きにけり。

あはたし、狂はしや、
この思ひ、たとはい、
夏の 日照の 最中を、
頰れたる 城跡の
煉瓦より 登る
陽炎に 類へんか。

道しるべ

あはたし、狂はしや、
この思ひ、たとはい、
夏の 日照の 最中を、
頰れたる 城跡の
煉瓦より 登る
陽炎に 類へんか。

頰の 落ち、肩の 瘡せ、
身の 細り、かくまで、

あゝ 此悶や 何
人 若うして 痛まし、
行きて 迷ひ 求めて 得ず、
心 倦み、 氣 疲れ、
精 盡きて 上睨む
眼の 窪み 凄じう。

君問ひますな、 何なれば
さは 悩むやと、 君、
若人よ、 君が 眼には、
微けく、 遠く 近く、
見を隠れ、 何となう、

唯 美しき 光なきや—

或時は 爛々の
焰 躍つて 眼を眩じ、

或時は 燃え盡きし
燈心の 火の 明滅し。

かくて、天照る 春の光に、
花 かくばしう 咲き出る 見て、
夜半、野の 涯の 森の 蔭に
欠けて 淋しき、暗き月の
落ち行くを 見て、故とてはなき、
さあれ、止め得ぬ 熱き涙の

せき來る 度の 堪ぬ 感想。

迷なり、迷なるべし、

惑なり、惑なるべし、

さわれ、世は、人は、識者は、

この 悶 根絶やす

明けき 理とて 持たず、

さらば、さらば、君去れ、

我ぞ 獨り泣かまし、

泣き 泣きて 涙の

盡くる日か、或は、

ふこに 倚りて 安らげくぞ

眠るべき 岩も ありなむ。

こゝ 暗し、來し方 暗し、

行方も 同じ 暗がり、

さわれ、うは 眼の 誤りか、

非ずか、薄き光の、

あるが如、無きが如、

時折を、遙か 高きに、

遠くか みゆる 嬉しむ。

かの光 燃る 丘に

得も着かて 途の半ば、
斃るゝも 可し、うは、
運命なり、奈何せんや、
唯 我が墓を、願ふは、
輝きの丘への
途の上にて 在らしめよ、
うここに、我眠らん、
うここに、我眠して、
後の代、若き子等が、
此途 這る 折の
道しるべ 知らましとて。

あこがれて

あこがれて、雲と化り、
天の氣に溶かれて、
五月の雨と じよぼく、
千萬の花に くだけて、
日に映ゆる 玉どならまし。
あこがれて、風と化り、
うよびくと、蔭ふがき、
木の間を、流に浴びて、

水草の細葉に堰かれ、
白花の小さな消まし。

あこがれて、鷺と化り、

秋の日くらく寂びたる

湖畔 顔れし城の

古壁の岩の上よちて、

幽眠の夢を追はまし。

あこがれて、雪と化り、

空につらく枯れ野を

寒風に捲かれくつて、

朽井戸の暗き底に
音も無う溶けて消えまし。

こまに

小き 我友 雅び姿の
白木滑らに、驚の香か
をる
キオリンの 美しこま。
氣の如き 四條の
かほろ絃 たどは、
乙女の 額を 流るゝ
はづれ毛の 疎らなる
冠りて、 臙脂の 黄に 匂ふ
ふくやかの 盤の 上に。

沈黙よ、汝に思わりげ、
漂ふ 絃の 残り音 吸ひて、
來し方 三とせ、末はるかに、
ねころかや、幽なる 夢を濃く。

愛

愛の きざみし 胸なる 影
愛の 授けし 胸の わたゝみ。

うの 影は 花より 妙に、
うの 熱は 火より 烈し。

うの 影は 胸の 大帝、
うの 熱は 胸の うまし香。

うの 影は 永久に 消えず、
うの 熱は とはに 冷えず。

沈黙

人は 得知らぬ 惱みの
ひねもす 胸を こめては、
組む手、悶々に 堪わすて、
慰藉と 緋く 聖經

畏さに、れのづと 締まる唇
沈黙に 開く 心の 眼に

かすけく 映つる 尊き影。

そら 遠く 吹く 風

岩は 動かぬ 信頼

じろ金の 寒ぞ 胸に 築ける

籠もれば 深き 城の 寮や

佳香に 煙り、金翅が 舞ふ、

夢か、非ず、あてがれか、否。

昇り 澄みたる 氣根の

高うして、われと拜がむ 我が心かな。

花 賣

朝な 朝な、
東空の 紅雲 分けて、
光 音なく 野を 渡る時、
山桃の 簇葉 冠りて、
蠅蠅 咲く 小川に 添へる
葦小屋の 小さきより、
紅燈 透く 大理石の
やわらかく、あたゝかき
うれかとも 思はるゝ

美し 娘が、なよやかに、
百花の 色香を 盛りし
籠さげて、城の塔
はの見ゆる 森かげの
市さして、賣らんとす 行く。

夕な 夕な、
薄紫の 霧に 卷かれて、
示導の 星 仰ぎつゝ、
夕禱の 鐘に 送られつゝ、
少女 黙念の相 氣高く、
感謝の 涙 見ゆる 歸途

辻の土橋に地藏を禮し、
一本立てる柏めぐりて、
麥畑の真中を透遁る、
芝徑を静かに辿り、
古樫の林の奥の、
れろろしき獄屋見舞ひて、
堅く冷き鐵格子より、
籠に残りし花を皆がら、
束ねて笑みで、ねもごろに、
——
老いさらばいし囚人へ
慰藉と惠むを常とせりき。

若うして戀の遺恨に、
人を屠りし罪問はれて、
三十年あまり、暗黒と
寂寞に胸の憤炎は
埋み火の燃ゆる立たぬ、
執拗くも熱せしが、
黄桃紫色光薄く、
獄屋の鐵網撫づる夕べ、
氷雨鼠黒の針刺す暮、
たうがる、頭とし云へば、
ろこに聞くやさしの足音、
神々しかる姿よせて、

遣る 花束の 數積れば、
罪人、 花の色に、 香に、
少女の 情の やさしきに、
慚愧と 悔悟の 月は、
怨恨の 叢雲 分けて、
夜な夜な、 光輝をまさり、
眞如遍照 本然の 性に 歸りぬ。

夕されば、 老いし 罪人、
寂寞 闇黒、 寒濕の
領する 獄屋の 窓に 倚りて、
夕露に とぼとぼと

昏れて 行く 淋しき 森の
下路を 遠くも 見やり、
わが 若き 天使は と
待ちあぐむ 心根ぞ
いぢらしく、 いたましく。

霧白う 流れて、
無き程の 風 おりく
枯れ枝を 渡る 夕ぐれ、
囚人、 窓框に 絶りて、
残んの 夕光 退いて 行く、
朽ち葉 布く 下徑 遠く、

眼を走せて、少女はと、
夜の幕厚く落ちて、
我が足の見ゆるなるまへ
待ち待てど、何故か、
花賣娘は終に來で、
初夜を撞く鐘の音は
時雨にぞなりにける。

鶉鳴く朝あけ、
秋たけし薄日
はかなげに、獄屋へ
這ひ入りしるの時

老翁の枯れし形骸は
骨既に冷たく、
秋の長夜悶ねて、
萎みにし百花の
わたらしき、ふるき束
堆きなかにうもれて
美しき死をす遂げける。

秋

(一)

葉は 落ちぬ、
ひとひら、
又 ひとひら、
いかなる 深き胸の
奥よりや、この音——
秋風、
うす黒き海うめさや。

(二)

虫の音よ、
かすかに、
ほそく、
又 かぼそく、
しらぶるは、
何の 悲調乎、
その聲に、その譜に
ふさふべき詩やある。

(三)

更し 夜の 寂寞を
 ゆるがせて、遙に、
 江を 越えて、かなたの
 林より 流るゝ さや音――
 笛の音よ、
 絶えつ、つゞきつ、
 わがりて 細く
 沈みて 太く
 聞くとなき 心を誘ふ

(四)

堪ぬ難き 愁の調
 切なりや、切なりや、
 いつしかも 湧きし 涙の
 はらくと 古書の上
 霏々と 小雨の、
 枯野 十里を
 蕭々ど
 煙る あした、
 朽杭に

尾羽 擦り 切れて

縮める 鳥の

眼を 閉ぢて、

首 動かたむけて、

地の 極み 踏

つめたき 音の

かすけき 呻き

聞くに 堪はずや、

その 瘠せし 背

胸の 毛を 刺きし 羽

ゆるがせて、

時しなう

鳴く 聲の 運さびし

ひびきそや 雲

はろくと

今 菊散りぬ

北の窓。

北の窓。

(五) を 土 人

間を 登る 峠の

徑を 盡く 頂を

相挟む 深木立

星 青い 流れ

星 青い 流れ

右を出で左に入りぬ。

仰げば、圓き月星空

擧ぐる手に、觸るゝ、ねもひ、

夜を、寒き、秋風に

絃なして、さまよふ、雲を

奏でなば、聞ゆ

聞えぬ、微妙の

幽愁の、調や、いかに。

苦蒸せる、庚申塚の

古碑に、片眩をよせて

翼得し、翳わこがれぬ

西に、又、北に、霞

はてし、無う、高く

涯なき、涯を、

漂ふ、我の、

魂よりや、非ずや、

うつゝなき、眼掠めて、

又、星の光、流れぬ。

古 壺

鶏ニトリの こゝと 鳴く 音に

ふと 醒さめし 秋アキの 里

暮ヨちがき 日ヒ丹ニら

流れ行ゆく 百ヒャク日ニチ紅ベニの

幹ミに 背セ推おして

抱かけるは 白シロ聖マカの

錆サビ 青アヲき 無ム古コ壺ウツ

奇キ花カ 鬼オニの 夢ユメの 如ニ

糸イト金カネ 緒オく 寂サマびたる

蓋フタとれば 灰ハイ白ハクに

乾カ枯カれたる 頭アタ蓋フタ骨ボネ

欠カけ 落オちし 疎スらの

黄ワウなる 齒ハを ゆるがせて

ひゝと 其ソノの 笑ウひ聲コエ

嘲ウツクシみげの 音ネ 寂サマびて

『死シの 領ネ へに 情ナラヒの 火ヒ

とはに 消クえ、 血チの 香カ

肉ニクの あたゝみ、 皮カの 色イロ

みなから 失ウせて、 唯タ

空ソラと 枯カと 冷ヒヤと

相合む 不盡切

こゝに 變らぬ 生命

「時」と からみて 行はる。

こゝに 記憶なく 計心

こゝに 豫計なく 計心

こゝに 運命なし。

さわれ 其の 美は種

思はぬ 想す 心は種

見えぬ 色 味は種

にははぬ 香 味は種

響かぬ 音 味は種

あらゆる もの、 數々

すべては一、 一は總

これを 眞と云ひ、

これを 法となす、

こゝに 美なく、

こゝに 善なし。』

おもかげ

見かへれば、おぼろく
はるくと、昏き 來し方

「今」を流す、時の潮

千種の 彩に 織られて

うねくと、唐錦

端なき 帯に 似たりや、

雑色 じら濃くすめる 地に

金糸 銀糸の きらめきか

まだらに 浮ぶ 人の おもむ

美し人の 優類 さやかた。

悠々淀まず、時は 行けど

戀しき 面わの 濃うか 薄く

映らぬ 波こり 絶えて かなけれ。

おもかげ

いさり火

索漠 たとへば 夕の海の
暗澹 闇に 消え入る如く
模糊蒼茫の 生の 潮に
見よや 愛てふ 燃ゆる 漁火
からむよ 情の 玉藻 花草。

「生」の 苦海の 闇く、寒きに
光と 熱を 與ふるは「愛」
「生」の 苦海の 寂れ、荒びに
薫りと 色を 與ふるは「情」。

君こそは

いくろたび、あゝ、いくそたび、
ねれんじの 光の 奥に
はるくと 百花 匂ふ

「生」の道 映しては、
光榮、幸福、安樂の
將來に 酔ひしれしめし
君こそは、あなかしこ、
靈術の 美き 法者。

いくそたび、あゝ、いくそたび、

地は、足の、下より、裂けて、

硫黄火の、焰、ゆらく

青紫に、燃ゆる、尖毎

水蛇の、入岐頸

血の、色の、鎌並めて、

生と、死の、國わかつ

煩悶、憂患、苦惱に

龍巻かせ、渦巻かしめし

君ころは、ねそろしや、

靈術の、美き、法者。

人へやる扇に

心臓、情思に、裂けなば、

小扇の、形にや、咲くべき、

匂の、ひらさき、淡紅、さふらん、

眞白、深紅や、色をな、問ひら、

うは、時折の――

韻に、こころや、薫れ。

眞夏、朝あけ、水の岸の

花に、玉置く、露を、掬ひて、

小扇 揺れよ、君 其御襟に
願ふは、天の氣 薫り 淡く、
雪布く 素絹の
御胸へが 泌めよところ。

...

幻想

白雲 ゆらぐ 靈音 聞きて、
露の 圓葉の 蔭に めざめ、
夏の 日 さらりと 白う 射返す
柿の 簇葉の 枝間を 抜けて
躍れば 蒼穹、いつしか 君と
抱いて 相飛ぶ 萬里の かなたに
煌耀 五彩の 虹 まばゆく、
天路 半ばに 我れは 眼しひて

絶れば戀人 肩 冷たうて
毒蛇の 錢鱗 連る 如し、
怪しやと 疑念さす 其利那
血の波 燃ゆる立つ 淵に 落ちぬ。

「おな、我れ死しぬ」と 合掌靜坐
専念 樂土を 額に 描けば、
秋風 をちこち 野に 月光 満ちて
恍惚 行くとしもなう 迎り、
歩毎に 瘡すると 胸を 探れば、
身は 枯草一管 水に 添ひぬ。

黄金小宮

青實葡萄の 房 幾つら
雨の 肩より 膝に 受けて
袖垣に 倚る 水の ほとり。

うつけ心地の 背に ものありて、
黒髪 まじはる 雪の 臂延べ、
やさしき 掌に、黄金造の、
紫濃藍の 總を 結へる
小篋を からりと 揺り薫らせて、

君、こを懐かば、齡は盡さじ

倏忽、四邊は淡紅の霞こめ、
脚邊に、織月、翠銀煙り、
白鴻、我をば載せて飛ぶに、
如意の花片、雨の如く。

騷樂、狂じて、紐の紫

ほどけば、靈香、薰ずる所、

身は、散り碎けて、無数の星火
深紅の、きらめき、天を蔽ひぬ。

金鼓

橄欖色の綾羅

佳香、薄き

袂、三尺

眞白手に

金鼓、捧げて

立てりな、妖女

嬌乎とばかり。

「打てとや、響の韻によつて

汝が性判せん」とや、うは奇なり、
好し、いざ、真向に正しうかざせ
「あゝと、ひと聲、反指、うろへ、
打てば、何ぞと、金鼓は無うて、
妖女が、軟手の、掌ふかく
入るよと、思へば、五つの指に、
うと、熱から、握られてあり。

「ね、汝れ、無禮者、鼓は打たで、
奇怪、何物とぞ、我手を打つや、
やよ、又打ち見よ、此度ころは
外さず、最央を、見事に、打てや、

妖女、嘲笑の色も、艶に、
緋總の、薫香を、振り、漂はせ、
両手に、抱いて、胸の前に、
金鼓の、容量は、前に倍し。

「こたみぞ外さじ、あれ」とばかり、
掌かへして、強く、打てば、
又こは、何事、鼓は無うて、
我手は、妖女の、乳を探り、
双の、腕に、背を、捲かれて、
軽き、懐抱の、中にして、在り。

妖女、きりりと柳眉を瘡はせ、
咄、たわれ男や、さは、何なれば、
この、狼行をば、敢て爲すや、
我体を、突き退け、せら笑ひて、
「いざ、打ち直せ」と、金髪揺つて、
こたみは、優頬の、ほとりに翳し、
金鼓は、又もや、容量を、増したり。

思はぬ、罪に、半ばは、狂ひ、
胸中、しどろに、振ふ、手あげて、
金鼓の、たいなか、碯と、打てば、
何ごと、我手は、頸を捲きて、

薫する、紅唇、ひしと、吸ふに、
妖女は、見ゆる、毒蛇と、化りて、
冷き青鱗、迤逦、三丈餘、
十捲、二十捲、我れを、緊めて。

園

閉ぢよ、早く

忘れまほしき時に
消ぬ失せむ影ならば、
ものに満つべき胸に
宿すべき隙なからめや。

あゝ、否、待てよ、しばし、
そは恐ろしき客人、
胸の血を吸ふ美しき魔を、
閉ぢよ、早く、胸の戸を、門守。

門守よ、汝が名は「愛」、
あとづるゝ影警むと
門守るに、汝れは餘りに弱きかな。

愛の門より

もの 忘れ易き 人間の
とこしへに 忘れ得ぬ
影が 深く 胸に 宿る。
「智」の 門を くさりて
入るものは、 久しからず、
いつしかに、 ねのづから 消ゆ。
とこしへに 胸に 潜みて
人間ともに 墓さへ 被ぐ
ろの 影は 「愛」の 門より。

鏡ヶ浦雑詠

(一)

忘るべき 思ならば、
この波の 千尋の 底へ、
手すさびに 拾ひ上げたる
磯濱の 此の石と 共に捨てなむ。

忘るべき 思が、 否か、
惑ひつゝ、 わづらひつゝ、

腰掛けし 岩に 日暮れて
わが足は 見ゆす なりたり。

見渡せば 沖は 漁火、
星の如 群れて 光るを、
わが胸は 夜の波、
黒く 揺るゝ音 絶ゆる間も無し。

(二)

砂濱に 書ける 此の字の、
白波に 洗はれ 去らば、

捨つるべき 此の 思ぞと、
はかな 占頼みて 見れば、
白波は 半ば 洗ひて
文字の 半ばは 残りたり。

さらば、こは、半ば 忘れて
半ば 抱かむ 思なりや、
惑ひてぞ 此の夕も 亦
磯づたひ さまよひ 行きつ
見かへれば 人なき 濱の
砂の上に 遠く 長く
わが 足あとぞ 亂れたる。

(三)

西ひがし 行きちがひたる

砂濱の この足跡に

かの君が 残したる

足跡も 交らひたらむ。

波近く 細う優しき

足跡は 君が其れか

たゝすみて こゝにしも

海の美や めでたりし

半月の 形なせる。

波の穂も 心ありて

うつくしき 此の足跡を

惜めるや 洗ひも去らで

さやかに 其のまゝに 残したるよ。

(四)

夕日かけ、八千色を、

波遠く、いろどるに

あこがれて 磯濱行けば、

岩の上に、かちと音たて、

傷ましや、我が足に、
砕かれぬ ちさき貝。

砕けたる むらさきの
いくひらを 拾ひ上げ
たなすこに 皆 載せて
思はずも ひとしづく
落したり 此の涙。

あゝ、あはれなる 貝がら
砕かれて ちりぐに
暴虐き 罪人の

手の上に 集せられつ、
恨み泣く 聲もせず、
みじろかず、つめたうで。

手を 揺れば 夕闇に
かちくど 微かなる音

あゝ、いたまし、あゝ、すべなし、
砕かれし 汝が身を 見れば、

腸が ちぎるゝ 思ひ。

あゝ、潮よ、いかなれば、
此の ちさき 貝がらを

かきのせて 運び上げしや、
汝れなくば、この夕べ、

この 悲みの なからましを、
さらば、汝れ、いたましき 幸さいなの貝よ。

汝なが 敵あての 手より のがれて、
水底みなぞとの 静けき 家に、
やすらかに 永久とこほが 眠れ。

悲みに なえし 足わけ
おもむろに 潜かづにれりて、
ひく潮に のせやれば、

日は暮れて、うしろの山の
鐘かね楼ろうより いとも哀れに
鐘の音の 添そひて行きけり。

(五)

海底かいぞこの 忍しのび得ぬ 思おもや
高たかじてか 噴はなせ 昇のぼり
水の面おもてを 破やぶり 出いで、は
うれはしき 色いろを 盛もりしか
夕雨ゆふさめの 海うみづら 遠とほく
眺ながむれば 島しまかげ 二ふたつ

もだえげのさまよいたまし。

としへの沈黙は包む
としへのつきぬわづらひ
舟にしてめぐりて見れば
草も木もなべて憂ひぬ。

あゝ 汝は 大海洋の

わづらひの 凝りにし姿

われもまた 問えの 化身

島がねよ、ゆるせ、もよとせ

松が枝に 小舟 つなぎて

こゝにしも 愁ひの 詩を
つゞりてぞ 死なましところ。

(六)

月の海 靄淡う、

波 和ぎて 空を 溶き、

沖 遠く 續く 漁火

金色に ちざう 燃ゆ。

岩は 打つ 波の音 重う

夜を 領する 沈黙叩き、

水天、色を一に
渺として 相和せり。

銀光は 空の星
金光は 海の星
燦たりや 爛たりや
相映じ 相飾る。

空も海、海も空、
いづこまで 海なりや
いづこより 空なりや
渺として 極みなし。

岸打ちて 返る 潮に、
乗りて 今 想像は 馳せぬ
いや遠く、島が根 越えて
迷ひ入る 漂渺の中。

飛び行けど、流れ行けど
果しなき 宙 はろく
想像の 翼 疲れはて、
いづらへか、又 歸り來ず。

(七)

立巖に 背 もたせて、

薄草履 砂に 埋めつ、
人も無き 磯濱の
眞晝をば 我れ獨り
あてがれつ 呆けて立てり。

ひとしきり 打ち寄せて
足洗ふ 白波に
ひかれ 来て かるやけく
わが 脛に 纏ひたる —
と見れば — 緑さやか
の
若藻草 莖細う。

手に執れば、なよやかに
撓みたる いたいけさ、
さからひそ、なびけよと
やさしうも ゆらくと
造られし 汝れなりや。

あゝ好し 美し 玉藻よ、
地にしては 若柳
しだり枝の なよくと
温風に 軽く舞ふ
やさ姿 うれは 汝が姉。

ゆかしかる 姉妹や、

優の、美の 表章とみ

祝福はれて、地に、水に

観る人よ、かゝれとみ

平和の姿、装ふや。

優しさに、をたけびて

悔ひ耻ぢぬ者ありや、

あゝ、優や、美や、仙脱や

うば、敗れざる陣にこそ――

争はざるに、勝つ者やある。

紅文字

指、五つ開けば、

手の掌に、こは奇し、

細文字の、なよくと

書かれたり、紅もて。

こは、全く知らぬ筆ぶり、

得解かぬ意味の、由りありげ、

唯見る、四の優假名、

詞ども、思はへず。

小琴 枕に、いつしか、

まどろみし間を、こは誰が

戯書り、山蔭の

一つ家の、椽にしそ。

惑へば、荒し、草庭

あことなう、得ならぬ薫香

あこがれて、何時しか、

葉を吸ひつゝ立てる、木の蔭。

のうせんかつら、はびこり、

蔽ひし下の、眞清水

覗けば、美し、我が影

白百合の、楚々として、

疑は、謎は、解けたり、

手の文字の、意味は、解けたり、

辱な、我も亦

ねもはれの、幸人か

と見れば、淡紅の花片、

野に山に、見渡す限り、

空填めて、上に下に、

散り、まよふ、盛観や。

四邊鎖す、薫香に
甘く痛む、心臓よ、
躍る血に、五體は、
骨溶くる、現無さ。

聲有り、何處よりか
耳に入りし、かしの音、
暖かき、うつけ心地、
消え失せて、れのゝく
手の掌に、文字としては無し。

も
だ
え

「愁める胸を、さらば、
眼を閉ぢて、人の長さ
双の腕に、任せんか。
日は、低き、草原、
ひとつ木の、杉の影、
落ちて黒く、江のはとり、
風に、揺るゝ、見つめつ、
散れ残る、社の跡の
礎に、腰を、ねろして、

夢のこと、我は思ひぬ。

ゆかしき面わ、深く、

底に薫る胸を、さらば、

眼を閉ぢて、人の軟き

白き腕に、任せんか。

眞晝、日きら、

陽炎、かをり、

緋牡丹、惱む

階の上、

枱扉に、肩倚せて、

うつらく、我は思ひぬ。

得ころ見ぬ、高き

いづこにか、在るべき

ものを、追ひ求めて

休まぬ、翼

はらたく胸を、さらば、

眼を閉ぢて、人の血の

熱き腕に、任せんか。

夜半、高殿の

銀の、欄干ゆ、

振る丈の、素絹の袖に

星坐を、揺つて、

驚く 火光の
動亂の 裡に、
狂はしう、我は思ひぬ。

古井戸

森古りし 丘の 裾を、
水黒き 流に 添ひて、
霧薄き 夕を 獨り、
うら若き 尼の 行く。
墨染の 袖に 寂びし
身は、肩は、勤業の
朝夕に 細りたれ、
しかすがに 染め残る、

微かにも、頬の血や。

落葉吹く 秋風に

送られて たゞくど

枯れ檜の 斜丘を 通り

葛丹き 藪蔭に

翻る袖 見ぬ隠れ。

茶の木並 繁く、疎らに、

相はさむ 小徑の 半ば

とゞまりし 尼が 眼は

酔へるごと、側なる

柚子の實の 黄なるに落ちぬ、

あゝ、こゝろ、小菊散らしの

紫の 振袖の

小春の 一日、

繪日傘を 傾けて、

行き摺の 若人を

見初てし 初戀の跡。

一叢 薄 尾花 老て、

行く風も 心置きげの

徑折れて、松の葉 赧く

散り布ける 芝生の

方丈が程 黄ばめるに

尼が 頬は 忽ち

紅を かつ潮し、

昔 薦たき 色香の

匂ひ出し こゝろ

月薄き 夜な夜な

かの君と 契りてし 小野。

女郎花 折れたる

枯れ藪に 杜絶はくの

石あらしき 道の果

八重葎 半ば 蔽ひし

古井戸に 夜は落ちて、

ろよ渡る 風におのゝく

尼が 唇 色なう、

わなゝく 諸手を 胸に、

もの怖の 眼を 閉ぢぬ、

あゝ、此處か、星飛し

眞夏の 一夜

小雨に 更し頭を、

世は罪と 誣ひ責むる

みるか子を、狂じてや、

搔き悶ふ 手より 投し井。

ねろろしき昔 歴々
額纏る 焔せらる
痛恨 恐怖 手にく
良心の 利鎌揮ひて
記憶を 八千裂の
苦痛に 疲れ果て
力なき 瘡し身を
古杉の 幹に 倚せてし
尼が眼の 明きしともなう
落ち行きし 井の底の
朽水に、いつしか出し
月影の暗く 細きに

何の魔が、尼は 誘かれて
一足 三足 よろめく
間もわれや、井の椽の
土は崩れて 永劫
光とっかぬ 真底に
人知らぬ 骨と朽ちけり。

春の日

(一)

春雨の 黄昏や、
蛇の目傘 細めに 閉ぢて、
散りかゝる 花の堤を
なよ姿 すらりと 細う、
水色の 振の袖
ろよ風に 靡きたり。

疎らに 注ぐ 春雨
優しうも 心ありてや、
蛇の傘 深ませて
傘の内 しのばしむ。

(二)

一つづゝ はらくと
落ちて来る 軒の雫を
悲しうて 我が泣く 折の
涙にか たくらべつ、
窓に依り、 うとくと

春雨の 小半日は
淋しうも 暮てけり。

(三)

人と樂しむ 人なれば
恨も人に 深き人、
あゝ君も人、我も人、
君、我 笑み、我を忌み、
我、君と笑み、君を忌む、
花あればこそ、春の日は
恨み恨まれ、笑み笑まれ、
けふも 夕べと なりにけり。

靈 鐘

天上の花や 碎けし、
おと 胸に 響きたる
るの音する 鐘鑄んと、
技工に凝り、念じ惱みて、
うら若き 鐘匠
痛ましう 頬れちぬ。

紫の 焔を 捲いて、
深紅 燃え立つ 熔鑪に、

幾^よる夜半、精^しや籠^こめけむ、
満願^{まんげん}の、静^{しず}き早晨^{さあけ}

冷^{ひや}え成^なりし、鐘^{かね}の、いみじさ、
あなかしこ、望^{のぞ}満^みてたり。

雨^{あめ}細^こき、里^{さと}居^いの、獨^{ひとり}

倦^うじては、撞^つ木^き把^とる夕^{ゆふ}、
妙^たの音^ねの、心^{こゝろ}に泌^{しみ}みて、

我^{われ}ながら、うら恐^{おそ}ろしう、
青^{あお}星^{せい}の、覗^{のぞ}く、破^{やぶ}壁^{かべ}、

薄^{うす}闇^{やみ}の、も^もの凄^{せき}きかな。

迷^{まよ}ひ行く、奇^き魂^{たま}や、ふと、

感^かじても、潜^{ひそ}みしものか、
見^みるからに、齋^{いひ}し此^{こゝ}鐘^{かね}、

岩^{いわ}白^{しろ}き、後^{うしろ}の崖^{がき}に

月^{つき}落^おつる、宮^{みや}の朝^ああけ、
金^こ色^{いろ}の、梁^{はり}に、吊^たられぬ。

若^わ草^{くさ}の香^かを、か^からみ立^たつ、
陽^ひ炎^{えん}の、攀^たづる、夏^{なつ}の日^ひ

霧^{きり}黒^{くろ}う、波^{なみ}打^うつ夕^{ゆふ}べ、
森^{もり}越^こえて、丘^{かみ}を滑^なりて、

奇^くしき音^ねを、漲^{たか}ぎらすに、

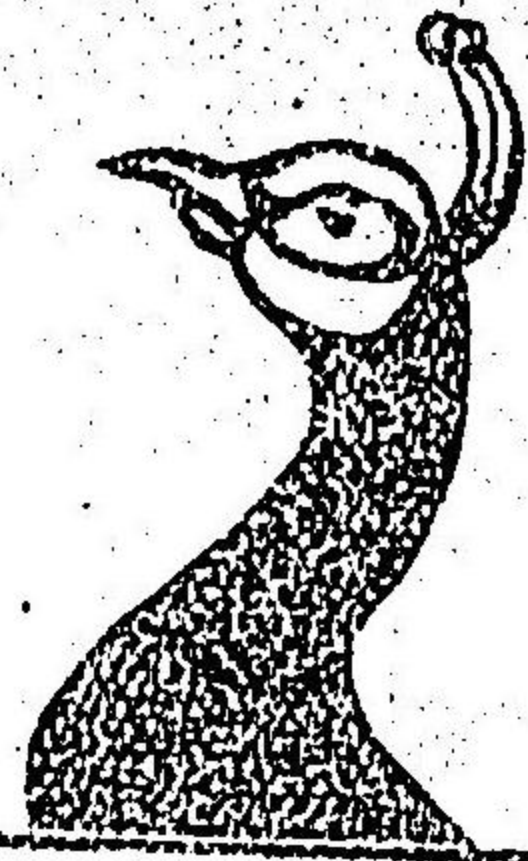
靈鐘は 日毎名を得ぬ。

幾度か 星は 移りて、
騒ぎ初めし 世の果、
旗鼓おどろ 颯を 捲きて、
雲拂ふ 紅焰の底、
兇蠻 鐘を 掠めて、
一村 遠く 唯 灰。

時を食む 黒潮荒く、
鐘匠 揺られく、
つくも髪 霜れけば、

今生の 名残を せめて、
我鐘に 一目 惜まむ。
憐れなる 老の願や。

くづ折れし 秋の末花
夕風に さいなまれつも、
薄き日の 光 慕ひて、
瘠し地を這ひ 惱む如
うらぶれて、老いさらばひて、
わが鐘を 尋ねつゝ、
迷ひ行く 山の北、川の西。



不評
復新

明治三十九年二月九日印刷
明治三十九年二月十五日發行

著者

細越省

發行者

東京府豊多摩郡下戸塚六百二十六番地
日高藤兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町四丁目五番地
江澤三

印刷所

東京市神田區末廣町三十五番地
江澤印刷所

發行所

東京市本郷區
千駄木林町百九十六番地

日高有倫堂

定價金參拾錢

郵税金四錢

靈 笛 終

行く春の花 散る夕江、
霞の遠、薄る、音追ひ、
漕ぎまよふ 枯れし腕に
力つき 流る、小舟
緩く速く、波のまに、
いづこよりか、又も微かに
懐かしや、わが鑄てし
鐘の音は 絶えつ、續きつ。

大 賣 捌

東京市京橋區尾張町
 東京市京橋區神保町
 東京市京橋區神保町
 東京市京橋區神保町
 東京市京橋區南傳馬町
 東京市京橋區通三丁目
 東京市京橋區表神保町
 東京市京橋區吳服町
 大阪心齋橋南久太郎町
 大阪南本町座磨ノ前
 大阪備後町四丁目
 京都三條寺町
 京都二條寺町
 神戸北長狭通
 甲府市柳町壹丁目
 水戸泉町
 野州足利町一丁目
 廣島市
 岡山市岡山町
 岡山市岡山町
 周防國岩國町
 山口大市町
 高知市檮崎町
 熊本市新町三丁目
 熊本市
 鹿兒島市松山通ノ仲町

警 醒 社
 東 京 堂
 上 屋 川
 前 田 川
 目 黑 次郎
 林 平 次郎
 修 隆 堂
 北 音 館
 福 本 社
 杉 岡 助
 吉 岡 平
 聖 書 房
 若 林 書 舍
 福 音 舍
 大 塚 柳 正 堂
 川 又 銀 藏
 青 木 書 館
 積 善 館
 奧 田 金 昌 堂
 白 銀 日 新 堂
 同 支 店
 澤 本 書 店
 長 崎 次 郎
 好 文 堂
 久 永 金 光 堂

筑後久留米市
 靜岡市
 橫濱市
 同
 同
 同
 盛岡市肴町
 前橋市曲輪町
 越後國水原
 新潟古町
 越後長岡
 金澤市片町
 高岡市守山町
 福井市佐桂枝中町
 信州長野市大門町
 信州松本市
 信州諏訪町
 仙臺市新傳馬町
 仙臺市京二番町
 仙臺市大町五丁目
 陸中一ノ關町
 陸奥弘前市土手町
 青森市米町
 秋田市茶町
 北海道札幌區南一條四三丁目

菊 竹 書 店
 吉 見 書 店
 第 一 有 隣 堂
 弘 集 堂
 勉 強 堂
 弘 文 堂
 佐 々 木 仙 助 堂
 煥 平 堂
 西 村 六 平 店
 西 村 支 店
 西 村 支 店
 宇 都 宮 書 店
 宇 都 宮 書 店
 學 海 堂
 品 川 書 店
 品 川 書 店
 西 澤 喜 太 郎 店
 松 進 堂
 日 進 堂
 紀 港 堂
 鈴 木 書 店
 藤 崎 書 店
 佐 藤 喜 年 店
 今 泉 道 太 郎 店
 同 支 店
 成 見 清 兵 衛 堂
 富 貴 堂

明治三十九年二月十日印刷
 新刊發行の都度増補訂正す

有 倫 堂 出 版 書 目

東京市本郷區千駄木、林町百九十六番地

日 高 有 倫 堂

川上眉山著○鍋木清方書

近刊小説 觀音山

(上製美本)

定價 金七拾五錢

郵税 金拾五錢

同情豐富 文致清麗

思想高逸 裝釘美麗

これ本書の特色也

(近刊豫告)

網島梁川譯

ルナン耶蘇傳

定價金一圓五十錢
郵税金十錢

(上製美本)

耶蘇は人類の王也。ルナン其傳を結びて曰く「其教は永へに新なるべく此物語は氣高き眼に涙を溢れしめ其苦みは優しき心を動すべし、世々の後まで人類の中曾て耶蘇より偉いなる者生れずと語り傳へなむ」と。此書教主の生涯、其靈しき神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論じ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀、社會主義觀また此間に隱見す。自由討究の精神一貫して批評の鋭刃觸れざる所なく、之がため一時歐米基督教界を震動して顔色を失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと云ふべきなり。梁川先生は綸理現麗、現代獨歩の筆を以て此書を齎して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の自眉となすものと摸範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也。

泉鏡花著 鍋木清方書

再版小説 誓之卷

定價七十五錢
郵税金十錢

(上製總クローズ美本)

これ鏡花先生があふるゝばかりの同情を以て、天と地と人に訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也

饗庭篁村著 鍋木清方書

新刊小説 不問語

定價七十五錢
郵税金十錢

(上製總クローズ美本)

竹裏の蟾蜍地仙と化して氣を吐くと虹の如く、簾中の彌二郎亮鐵砲を發して僅に雀を驚かす、しかれども其光り天に沖り、其響き地を動かす、これ著者の手裏にあらずして其の不問語なり

饗庭篁村著

近刊小説 山

定價七十五錢
郵税金十錢

(上製總クローズ美本)

山水淺深、人情厚薄、溫泉氣蒸して土地暖かく、貧富心をかへす情義うるはし、花あり、實あり、涙あり血あり、一讀その情趣を掬すべし

饗庭篁村著

近刊小説 虚空塵

定價七十錢
郵税金十錢

(上製總クローズ美本)

塵積つて山となれば山は碎けて一陣の風に吹飛ぶべし、飛びてまた積りて山となる其の戀の山欲の山、山又山に踏み迷ふ者のよき道しるべは是れなるべし

大町桂月著

再版 我が文章

定價四拾八錢 郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縦横自在真情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり生の文の如きは實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著

新刊 紀行 山水寫生

定價四拾五錢 郵税金六錢

天隨氏の紀行文は、世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に踏かし、他のもの、これ其文の特色にして、決して、他人の模倣を容れざるものなり。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の机上の讚賞し、天地の美を景仰するもの、机上の書なかるべからず。

德田秋聲著

新刊 小説 花たば

定價四拾五錢 郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の数は何々ぞ。紅白紫黄必しも剪採の妙を悉さざれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文章なり。秋聲子の真技倆と抱負を窺はむには、此篇を拵て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高覽を希望す。文學士 小原無絃譯

新刊 原文 シェーラーの詩

定價拾五錢 郵税金四錢

シェーラーは一個の豫言者なり抒情詩人の醇なる者なり其詩を作爲するや神興の白熱を以てす光焰萬丈生氣辭句に溢る眞個天馬空を奔るが如し無絃子の詩を心讀する多年今や彩筆を揮つて遺憾なく我の詩型に譯す原詩の眞髓を傳へて遺憾なく朗々として眞に高誦するに足る乞ふ詩神の寵兒たる者一巻を抱いて詩腸を肥せ。

文學士 大町桂月先生選評 日高有倫堂編輯部編纂

近刊 明治大家文集

定價金七十錢 郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず文星森列著作の多きと汗牛充棟も管ならず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のとにあらずこの書正確なる批評眼を以て明治三十八年の間論文といはず美文といはず小説といはず苟も文章を以て一家をなし特色を有せる文豪數十名を撰びまた其名文豪の特色を發揮せる名篇を選び添ふるに桂月先生の詳細なる批評を以てす明治文章家中の眞の文章家は集つて此の書にあり眞に之れ明治文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人においては以て眞の模範とするに足る有益にして且つ興味ある良書也

秋元蘆風譯

新刊 獨野葡萄

定價拾五錢 郵税金六錢

○原文對照の卷末に評註を附す。收むる處、詩、數十篇、汎く、獨逸詩人の傑作中、主として、叙情的逸品を採つて、卷末の評註に翻したるもの、獨逸詩人の影を窺ふと同時に、獨逸詩人の面影をつか、請ふ、庭園の花に酔るものは、來て、野邊の果實を味へ。文學士 小原無絃譯

新刊 原文 バーンズの詩

定價金拾錢 郵税金四錢

文學に平等主義を持して革命思想を鼓吹せし者は實にパーソンズを以て古今東西隨一と爲す其詩や古法舊格を脱して天真朴直なる精神を現に最も創新を以て勝る今や無絃子の靈管に依り譯成り多感多情にして功名心燃ゆる如き若き田園詩人の面目髣髴として其一卷に溢る満天下の才子佳人幸に愛讀の榮を吝しむ勿れ

大町桂月著

代表日本人

定價四拾五錢 郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらずし
て事實也歴史也國體也祖先の發揮せる國民
性也我が國には儒教佛敎以外一種の武士道
ありて今日の發展を致したる事今更言を待
たざる所なるが武士道の真相を知らむとせ
ば理論のみならず十分也之を人物事實に
徴せざるべからず此書日本國民の特性の何
たるかを説き建國以來その特性を發揮せる
人を選びて其面目を描き日本國民の前路に
光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國
民の歴史也兼ねて道德經也。

大町桂月先生選

時代青年文集

定價四十錢 郵税金六錢

世に活氣あり情熱あり純潔玉の如きは青年
にして青年は實に時代の花也火也當代の文
豪桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も
懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中

より其尤なる者を抜き厳正なる批評を加へ
て時代青年文集一卷を編せらるる收むる所叙
事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり咸
な絢爛花の如く情熱火の如し以て附録には文
壇の一大家の元氣を鼓舞すべし「夜」を始
常代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を
飾る

東宮侍講 本居豐穎先生著

紫文摘英

定價四十錢 郵税金八錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を
要せず而も之を教科書に使用せむには餘り
に浩濶に過ぎ又事實に悖倫非徳の箇處多く
女子の教育あるべき居先大に之を概し五十
博士の稱ある本居先生大に之を概し五十
四帖を通じて其の英を摘み去り最も聯
絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」一卷を編せ
らる即ち是れ源語全篇の縮圖にして一讀其
大意を窺ふ是れ併も紫文の妙は此一卷に盡
くせり各種女學校の良教科書たるは勿論荷
るも國文學に志あるの士女は必ず一本を備へ
ざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

帝國夏目先生序 文學士 小松武治譯

大學上田先生文

續沙翁物語集

定價七拾錢 郵税金八錢

譯者曩日沙翁物語十篇を公にして世間の好
評を博し期中ならずして第六版を重ねるに
至れり今又更らに自餘の十篇を譯集して續
沙翁物語集を篇す各篇悉く名什譯筆例によ
りて明快加ふるに細密なる註解を施して讀
者の便益を計れり

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼

定價參拾五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の
趨勢を論斷し、毫も顧慮することなきは、
評論家としての著者の態度なり、その問題
は、文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り、
虬龍の片甲、なほ能く雲を成す。一卷收む
るところ、凡そ七八十篇、長短錯落、理致あ
り、情趣あり、眞個人間稀に見るの好文。

文學士 久保天隨著

紅葉

定價三拾五錢 郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韻生
動、底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の
如き、事起す大英、韻文には、一唱三嘆、
覺えず、蒙古の雄、大空を横絶するに似
る肉躍る、唯だ本書に於て之を觀るべし。
細越夏村著

笛

定價參拾五錢 郵税金四錢

日光暉の野を、深き水の行くを見ずや。
水面は爛爛として、金波銀波何ぞ燦々の極
みなる。然れども、想へ、十尋の底、油々こ
し、如きは、流れる何ぞ夫れ幽冥なるや。
斯の如きは、詩人夏村の胸に澎湃する詩
想の水に流るは、目の上を流る波を、胸に
の注に、深底の奥に心を澄ます者、水波
坐して、深底の奥に心を澄ます者、水波
自然の「靈」の奥に心を澄ます者、水波

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

五改 冊 向上の一路 定價十錢 郵稅六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀
め我が國に於て哲學的社會主義を建設した
るは此書を始めとす△安部氏の駁論及著者
の駁論は益々新社會主義の本領を發揮して
共に光彩陸讀たり△近時の大著述にしてし
情に該ね羨る者は此書なり敢て江湖の讀書
子に勸む
大町桂月先生 中内蝶二先生合著

版六 少女と山水 定價五拾五錢 郵稅六錢

人生の美疑つて少女に在り自然の美疑つて
山水の優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文少
女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月
君の洒脱の文山水の幽趣を寫して雲煙紙表
に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を
縦にし高尚優雅家庭の讀物ともすべく軍國の
讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙
の美を味ひ給ふべき也

山口先生序 シルレル原著 齋木仙醉譯

新刊 接神術 定價貳拾貳錢 郵稅四錢

天師と稱して大聖伏羲の古道を唱導する著
者が幽に詩人シルレルの雪の如く皓く月の如
く術に名神智學なるものを譯して、聖靈は接
神術なりとの大論斷を試む、殊に世界の百大詩
人の母心を讚美せる百人一首を附録として
東郷大將母堂に捧ぐる、荷くも文藝に志ある
士女は之を讀まざるべからず

文學士 大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 岩野泡鳴著

新集 夕潮 定價參拾五錢 郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏し
て、うちに無窮の悲觀を備ふ而してその行
文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、
沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、
荷も久遠の感慨あるものは來つて、この冥
想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

文學士 大町桂月著

版七 わが筆 定價四拾五錢 郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓
あり才氣あり霸氣あり或は酒脱に或は沈痛
に或は眞面目に或は談諧に短くして寸鐵人
を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに
一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆
を以てす家庭學校社會及び文學等に關する
卓見彩を放つ天地間有情の快文字もその
間に見る處に充ち才情擲すべき文字也
大町桂月先生序 角金潮聲著

版參 宇宙と人生 定價貳拾五錢 郵稅四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所なら
んや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究
め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生
の眞諦を内觀直視せんとす茲に詩人あり天
地の美を捕捉せん肉薄して以て人生の本義
を直観せんとす本高の韻、艶麗の詩
人の情を文に綴りしもの古宇宙の麗を
謳はんとする者は來りて本書を繙け

海老名禪正先生著

版七 宗教々育觀 定價五拾五錢 郵稅八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老
名先生は本書に於て教育問題に關する所信
を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動す
るに足るものあるや必せり見よ先生が該博
の識を截つ論一讀人をしつて快刀思想界の亂
麻を截つ問題の限らしむ而かも本書の内容は
單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に
對する先生最近の思想を發表せられたるも
の實に濛々たる疑を容れず大方の識者請ふ刮目
して本書の光輝に接せよ
匿名隱士著

版七 破天論 定價參拾錢 郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議
的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人
生的觀を鼓吹したる壯快の書也本書の出づ
るや全國各新聞雜誌の版を印刷せり以て本
書が如何に愛讀せられたるかを知らべし

綱島梁川著

再版 梁川文集

定價 金貳圓廿五錢
郵稅 金拾五錢

上製紙クロース 頁數約千頁 額美木
梁川綱島先生、其高邁博大的識、精嚴理到の言、恰も燭を把つて照すが如し、されど先生は談理是れ能とする學究に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他而別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天他を戀ひ此戀を湛へて日夜に冥想し且暮に修養止まざる哲人も解脱の人も、理を談すれば簡淨にして靈活、感興を遣れば深遠にして豊麗、其想獨特、其文獨特、鬱然一家を成して現代思想界の一角に抜く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追従するを許さず、是れ筆に非ずして人格なれば也、弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

山口先生題詩 蘆風秋元喜久雄譯
訂正 獨逸 詩粹 紛紅集
美術的製本 定價 卅五錢 郵稅 四錢

グレート、シルレル、ケルナル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精眞なる筆を以て、翻譯したるもの、一字一句の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はして遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、蕪勃たる香氣、人を酔はしむるが如きもの集つて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

萬朝報記者 芥原華山編纂

青年と詩吟

定價 貳拾五錢 郵稅 四錢

人生豈思詩情なかるべけんや『青年と詩吟』は芥原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦する漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此卷を抱いて誦讀せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

文科 夏目先生校閱 チャールズ、ラム著
大學 上田先生序文 文學士 小松武治譯
講師 ロイド先生

訂正 六版 沙翁物語五冊集 定價 七十錢 郵稅 十錢

◎上製クロース四百頁 頗る美本

古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることもなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨璧シエロクスピアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を採萃し精緻なる翻譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戯曲の何たるを窺はんと欲するの士は須らく一本を購うて座右に備ふべきの書也

岩野泡鳴著

新體 悲戀悲歌

定價 拾五錢 郵稅 金四錢

著者の詩既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を経て、廣く人間界の煩悶を靈化する、蓋しこれ時代の詩界に獨得の地歩を占むるもの、而して「人の詩人」一海の詩人、今やまた「人間界の詩人」と呼ばんとす、向上か墮落か、乞ふ、この『悲戀悲歌』を見て、之を判じ給はんとす

高橋五郎著

杜伯品藻

定價 卅五錢 郵稅 六錢

トルスストイ伯の主義人物を評す一言一行一動一靜天下の毀譽を招致すトルスストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如く著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人を四方八面より縱横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其熾妍得失一目瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人とて之を評し而已ならずや◎讀書子愛讀の榮を賜へ

海老名彈正先生著

再版 基督教本義

上製 六十五錢
並製 五十五錢
郵税 八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解
答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放て
る豫言者牧師教祖の抱懐せる思想經驗に依
らざるはなし本書は基督教界の明星海老名
彈正先生卓抜の識勇健の筆を以て上はモ
セより下ルテル、シユライエルマツヘル
に到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教
の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の
榮を賜へ

齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價 金拾錢 郵税 四錢

トルストイの宗教論、大作小説や、海に
是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶
の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる
所以蓋し茲にあらん、然れども人は狂瀾怒
濤を壯とするに共に、湛然一碧の湖水を樂

海老名彈正先生著

人道

定價 拾錢 郵税 四錢

先生時局に關し大に感慨するところあり豫
言者の熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰
を吐き以て日露戦争の意義を高め國民の元
氣を鼓舞するのみならず軍隊慰問用の好冊子
讀書たるのみにならず軍隊慰問用の好冊子
り廣く世の需要に應せんとす幸に陸續御
注文を賜へ
加藤直士譯

トルストイの 日露戦争観

定價 金拾錢 郵税 四錢

露國の巨人トルストイ伯が今回の日露戦争
に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは
何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫
敦タイムズに於て「日露戦争観」と題する一
大論文を掲げたり今や邦人鶴首して其内容
の全斑を知らんと欲する時に際して其紹介
者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇
を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さん
と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

しまざるべからず。深林巨巖を賞するど其
に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は
即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也
讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪
が、如何に諄々として、天使の如き聲を以
て、博愛、自然、自由、勞働の大々的福音を鼓
吹するかを視ん。

苦學社社輯

苦學の伴侶

定價 拾錢 郵税 四錢

生活の道に往き艱める苦學生は此の書を讀
め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我
國現時の諸大家の成功の秘訣を知らんこす
る者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父
の醫咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦
學古今誰か苦學せずして成功したる者やあ
る苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實
なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は
學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たり
と謂ふべし請ふ一本を座右に供せられんこ
とを

横山筆助著

再版 成功したる 應用自在

定價 拾錢 郵税 四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖ど
も大抵不充分なる譯書、實際に益なき空論
的なるもののみ多し、之に反して本書は經
験の學理と諸種の積みたる斯學の老練家が、最新
の學理と得るやうな方法を参考して何人にも
理解し得るやうな又極めて懇切に述べられた
るものなり、且つ加ふるに催眠術の實驗書
を以てす、本書出で、我が催眠術界の知識
をあらんことを、
茅原華山編纂

我と人

定價 拾錢 郵税 六錢

本書は世間の好評を博したる「向上の一路」
生命一體篇を別冊と爲したるものにして萬
朝報の黒岩先生を始め諸家の談論文を筆
録したるものなり、柳は緑花は紅、是書を
讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座する
の感あるべし

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價廿八錢
郵税四錢

戦争の裏面に婦人あり戦争は男子のみにてなすものと云ふものは未だ以て今日の時局を語るべからず本書は實に婦人戦時に於てなすべき活動の方法及び戦争と婦人との天職を説きたるものにして事勢に適切なる事は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を力むるものは必ず一讀せざるべからざるの書也

基督教講壇集

定價七十錢
郵税八錢

本書は眞に生命の麴麴靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の説教を網羅掲載したる雑誌講壇の全部を合し改冊せしものなり居ながら各大家の口演を聴聞する好冊子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給へ

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

新刊 日本名家手簡

定價金參拾錢
郵税金六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せんと欲するもの先づ先輩の往復文を研めざるべからず、是れ本書の出る所以なり本書收むる所我國大家の模範文に附するに各其小傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟くも當世の活舞臺に雄飛せんとするものは男女を論せず一讀せざるべからず

